



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1988
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

無原罪の聖母

《罪の悪と恩寵の善》

1 「どこにいるのか?」

「(…)裸なので、(…)かくれました」(創世3・9、10)

無原罪の御宿りの祝日にあたり、私たちはまず創世の書に向かいます。無原罪の御宿りは、恩寵に満ちた新しい生命の始まり、人間性を罪から根本的に解放することを意味します。マリアは受胎の瞬間から、アダムと遺産相続を免れました。典礼はアダムとその遺産の始まり、つまり罪と死を相続するに至った経過を示します。

初めは無垢そのもので神の御前にいたアダムは、罪を犯した後、神から隠れなければならぬと感じます。「あなたの足音を聞き……かくれました」。罪という現実がまことに強力です。アダムはそれに気づくと恐ろしくなり、恥しくなりました。神の目からは善であれ悪であれ、何一つ隠せるものはありません。人祖の罪も、

2 神の目に止まらぬわけにはいかなかったのです。

ガリラヤのナザレトで起ったことも神の御前で展開しました。神はどこにでも居られ、その現存は全てに及びます。しかしナザレトのマリアという名の処女の家では神は特別な方法でおられました。

マリアは神の使いの言葉に当惑しますが、「あなたの足音を聞き……かくれました」という創世の書の場合とは異なる恐れです。マリアは神の声をガブリエルの言葉を通して聞いていますが、隠れ場を探しはしません。純真に全てを神に奉獻する覚悟で神の御言葉を受け入れるのです。

そして、訪ねて来られた神の御前に進み出ると同時に、自己の内へと深く心を向けます。「何のあいさつだろうと考えていた(ルカ1・29)」のです。処女マリアは驚いています。しかし神の使いの説明に助けられて

罪と恩寵

3 本日の典礼は皆さんの目に二つの姿を見せてくれます。罪と恩寵、言い換えれば神の道から離れることと神のもとへ立ち返ること、拒絶と救いという根本的な違いを認めることができます。

この違いを十分に描き出すことはできません。目に見えるどんなイメージを使ってもどんな描写をしても、《罪の悪》を再現すること、恩寵の美、聖性の精髓を再現することはできないのです。

全ての啓示と同様、典礼も目に見えるものを通して見えないものへと導きます。それは、「近づけぬ光のうちに住まわれる」(ティモテオ①6・16)御者に出会うことを目指して人間が絶えず歩んでいく道なのです。

にも係わらず、創世の書第三章とルカの福音書に記されていることの間にある違いが明らかになります。それは実に「敵対」です。「おまえとかの女との間に、またおまえの子

御言葉を理解し、「あなたのみ言葉の通りになりますように」(ルカ1・38)と答えるのです。

孫とかの女の子孫との間に、私は敵対をおこう(創世3・15)に表われている(敵対)の実現なのです。

創世の書の言葉は警告です。それは福音書の中で成就します。ごらんなさい。あの《女》が神の使いの前に立ち、聖霊があなたにくんだり、いと高き者の力の影があなたを覆うのです。ですから生まれる子は聖なる方です。神の子と言われます(ルカ1・35)という言葉を聞いています。(女の子孫)そこでマリアは「私は主の

4 この祭日はまず第一に人間の歴史の始まりにおける罪、原罪を通して、次いでナザレトの処女が、「あなたにあいさつします、恩寵に満ちた御方(ルカ1・28)」という御告げの瞬間に聞いた言葉を通して、私たちが無原罪の御宿りの秘義の理解へと一層近づけてくれます。

しかし神の啓示の論理は、本日の



典礼の論理ですが、さらに昔に逆上ります。パウロのエフェソ人への手紙に、「主イエズス・キリストの父である神をたたえよう……(神は)世の創造以前からキリストにおいて私たちが選び、ご自分の前に聖である者汚れない者とするために(エフェソ1・3〜4参照)とあるのを私たちは読みました。

従ってマリアの無原罪の御宿りの秘義を理解するには、創世の書で読んだ罪の始まりを越え、人間の歴史の始まりさえも越えねばなりません。時の始まり以前、「世の創造以前」にまで逆上るのです。そして神の測り知れない(次元)の中へ身を置くのです。ある意味では、私たち皆が抱かれていますイエズス・キリストにおいて、時が満ち人となられた永遠の(みことば)なる御子において、神の永遠性という(純粹な次元)に身を置かなければなりません。

主において私たちは聖なる者となるよう選ばれています。それは「主の御前に聖である者汚れない者とする」恩寵によるのです。

最も完全に選ばれたもの

5 天使が「恩寵に満ちた」御方と呼ぶ以上に優れ、もっと恩寵に満ちた人がいるでしょうか？

アダムの子孫で神の御前に「聖であり汚れない」故に一番に選ばれるのはマリアではありませんか？

この啓示の論理、同時に信仰の論理ですが、「この精神に従って教会は、マリアの子(世の贖い主)の功徳ゆえにマリアは両親による原罪、アダ

ムの罪の相続を免れて宿ったと教えます。第二バティカン公会議で確認したように(マリアはキリストによって崇高で異例な方法で贖われたのです)。(『教会憲章』53)

待降節にあたる十二月八日に私たちが宣言するのはまさにこの秘義です。贖い主の原罪の汚れない御母の周りに集い喜び敬意を表しつつ「贖い主を養った御方」と呼んでこの秘

義を宣言します。待降節は神の永遠の計画の道に沿ってこの秘義を示しています。その道は人間が神のもとへ行くため、神が人間に近づくのを決しておやめにならない「待降・到来」を意味する道です。「愛によって、イエズス・キリストによって、私たちが御自分の養子にしようとする定された」(エフェソ1・4〜5参照)からです。(十二月八日)

ナタンの預言と御告げ

「あなたは身ごもって子を生けなさい。それは偉大な方で、いと高きものの子と言われる。またその子は主なる神によって父ダビドの王座を与えられる。(ルカ1・31〜32)

私は彼の父となり、彼は私の子となる。預言者ナタンはダビド王にこう語りました。そしてこの言葉は、エルサレムに神殿を建てることにな

っていた王の子供のことを言っているようにみえます。これが恐らくこの言葉のさし当てる意味でした。私たちは御告げの時に、この言葉が(もう一つの意味、間接的ではあるが遙かに重要な意味をもっていた)ことを知ります。この言葉に含まれていたのは御託身(受肉)の前兆だったので。「いと高きものの子」が人間になります。聖霊の働きによりマリア(ミリアム)という名の処女から御子は生まれます。御子におい

て預言者ナタンの言葉、すなわち、「私は彼の父となり、彼は私の子となる」が文字通り成就するのです。

御告げの中で繰り返されたこの預言の言葉が成就する時、

(みことばにおける最初の来臨もまた実現する)のです。これこそ、旧約全体が準備をしてきた主の来臨です。この成就はたしかにすべての人の期待を越えています。(エンマヌエル)という言葉で啓示された真理に人々の眼を注がせるため、ナザレトの処女に英雄的な信仰が求められたのです。「神共にいます」ということは、神の民の神殿に神が住み給うことを意味するだけでなく、神が婦人の胎内に宿り、「人間として生まれた」人の子であることをも示しているのです。まことに「神にできないことはありません(ルカ1・37)

神は御子です。(あなたは私の子である。私は今日あなたを

を生んだ」と詩篇作者は歌います。この言葉でナタンの預言の真理が一層明白に表現されているのです。

主の来臨は、神御自身が父であること、そして子であることを啓示されたときに成就します。ここで私たちは神の秘義の中心に近づきます。御父と御子と聖霊の充滿はすでに御告げの言葉で明らかです。それは使徒たちへのキリストの前後の言葉、すなわち「諸国の民に教え、御父と御子と聖霊の名によって洗礼を授けよ(マテオ28・19)に到るまで、徐徐に明らかになっていくのです。

この荘厳な誕生を目前にする今、待降節は何よりもまず人間の体をもつ御子の到来の時です。すなわち聖霊の御働きによる御子の

キリストは無とされた

自らを無とされた

キリストシリーズ

①7

「見よ、この人を。」(ヨハネ19・5) 前回は、死刑の宣告の前に、イエズスを答打たせ、司祭長と長老の前に連れ出した時のピラトのこの言葉について考えました。傷を負い、茨の冠を被せられ、緋色の衣を着せられ、兵卒たちに嘲けられ、死なんばかりになられたイエズスは苦しむ人間の象徴です。

「見よ、この人を。」——この言葉には、ある意味で真の人キリストの真理が全て含まれているといえます。「罪を除いてすべて私たちと同

受肉なのです。御子は御父の神殿を建てるためこの世に來られます。ここでナタンの預言にあるダビドの子との類似が明らかになります。(…)

御子は天地万物を元通りにするために來られるのです。この宇宙の再建に人間を参加させるため御子は人となられました。この仕事は神の似姿として創られた人間の天職でありました。御子の到来は預言と期待の両方を成就することなのです。両者の終りをしると同時に始まりなのです。それは第二の到来の始まりです。そしてそれは「神がすべてにおいてすべてとなり」(①コリント15・28)王国が御父に返されるとき実現します。こうして「その王国は終ることがない」のです。(ルカ1・33)十二、二十



説教・講話・書簡等の抄訳

そしてこの一面は、「自分自身を無とすること」(ギリシア語で「ケノーシス」)の秘義の光のもとに受け入れ、また深く黙想しなければなりません。キリストは「本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとはせず、かえって奴隷の姿をとり、人間に似たものとなって、自分自身を無とされた。その外貌は人間のよう見え、死ぬまで、十字架の上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた」(フィリッピ2・6-8)のです。

2 書簡の中のこの節は、キリストの「ケノーシス」(自らを無とすること)の秘義に向かわせまう。パウロはこの秘義を表わすのに「自分自身を無とされた」という言葉を用いて御託身(受肉)の事実を示しています。「みことばは肉体となった」(ヨハネ1・14) 神である御子は神でありながら人性を取り、真の人となりました。人としてのキリストの真理は常に神である御子との関係において考えなければなりません。パウロの書簡にこの不変の関係が示されています。「自分自身を無とされた」ことは、決して神でなくなることの意味するものではありません。そのようなことは論外です。パウロがはっきりと示しているように、「本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとはされなかった」のです。栄光を奪われ苦しみと死に従属する人性を、真の神の子としておとりになりました。最後の犠牲に至るまで御父に従われたのです。

3 「人間に似たものとなること」は、「自発的な放棄」を意味します。それも人間として享受できる

「特権」をも含んだ放棄であったのです。事実御子は、「奴隷の姿を取りました。権力者の仲間ではなく、仕える者の一人となることを望んだのです。「人の子が来たのは仕えられるためではなく仕えるためである」(マルコ10・45)

4 福音書にあるように、キリストのこの世での生活は始めから貧しさという特徴をもっていました。ルカが伝えています「宿屋に部屋がなく、お生まれになったイエズスは布に包まれまぐさおけに横たえられました(ルカ2・7参照) マテオによれば、イエズスは生まれて間もなく避難民の体験をされました(マテオ2・13-15参照) ナザレトの隠れた生活も非常につましいものでした。家族の主人は大工(マテオ13・55参照)、そしてイエズス自ら養父と共に働かれました(マルコ6・3) 教えを宣べ始められた時もひどく貧しかったのです。宣教の使命に伴う不安定な生活状況にふれて言われました。「きつねには穴があり空の鳥にはねぐらがあるが、人の子には枕する所もない」(ルカ9・58)

5 「しるし」を示されたにも関わらず、キリストの救い主としての使命は始めから反対と誤解に遭いました。イエズスは監視下になりました。権力と影響力をもつ人々によって苦しめられ、ついには訴えられ、有罪の判決を受け、十字架につけられました。刑の中でも最も恥ずべき刑、重罪人にのみ課せられる刑、奴隷に対する刑でした。パウロが記すように、キリストは文字通り

「奴隷の姿」(フィリッピ2・7)を取られたのです。

6 「自分自身を無とされた」ということは、キリストが真の人間であることを際立たせる真理ですが、それによって人間というものも、真理が再び確認されたといってもいいでしょう。人間の再確認、人間の回復と言えるでしょう。御子が「神と等しいことを固持しようとはされなかった」ことを考えると、「はじめに」アダムとエバが屈した、「善と悪を知った」ようになる(創世3・5) という誘惑を思い出します。アダムとエバは被造物にすぎなかったにもか

自分の限界と数々の罪をもつ自分の姿だけが見ないとすれば、たちまち悲哀と失意に捕われてしまいます。しかし、主に目を向ければ、心は希望に満ち、理性は真理の光に洗われて、福音書が約束と生命で充滿していることを悟るようになります。

かわらず、「神のようになる」という誘惑に屈したのです。神である御子は「神と等しいことを固持しようとはされなかった」。人となることによつて「自分自身を無とされ」、全人類を困窮した状態から本来の尊厳にまで回復させてくださいました。

7 キリストの「ケノーシス」(自分自身を無とすること)の秘義を表わすためにパウロは、「自分を卑しくして」と表現しています。贖いの真理を伝えるためにこの表現を用いているのです。イエズス・キリストは「死ぬまで、十字架の上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた」(フィリッピ2・8) ことで、キリストの「ケノーシス」の決定的な面が記されています。人としての観点から御受難と恥すべき死によって自分自身を無とされたという面であり、神としての観点から御子を通して御父の慈悲あふれる愛がもたらした贖いという面です。御子は、御父と救うべき人類への愛から、進んで従われました。その時から人類の歴史における神の栄光、人となられた御子キリストの栄光が始まったのです。事実パウロは、「そこで神はキリストを称揚し、すべての名にまさる名を与えられた」(フィリッピ2・9)と記しています。

最後に、イエズスが御自身をよく「人の子」と呼ばれた事実について述べなければなりません。(例えばマルコ2・10、28、14・62、マテオ8・20、16・27、ルカ9・22、11・30、ヨハネ1・51、8・28、13・31等) 当時の言い方では、この呼び名は全ての人と同じ真の人を意味しました。確かにキリストの真の人性を示しているのです。

しかしその場合も、聖書が示す厳密な意味は、イスラエルの伝承からくる歴史的関係を心にとめて確認されなければなりません。それは救い主の概念を明確に述べているダニエルの預言(ダニエル7・13-14参照)に使われている表現であり、その影響を受けた呼び名なのです。すなわち、「人の子」は単に人類に属する普通の人間を意味するのではなく、歴史を越えて世の終わりに神から宇宙の支配権を受ける人という意味です。イエズスの言葉、福音書の中のこの表現は、神と人間、天と地、歴史と終末、全てを包む大きな意味を含んでいます。イエズス御自ら理解させてください。カヤファの前で神の子であることをはっきりと宣言されました。「人の子が全能なるもの右に座り、天の雲に乗り来るのをあなたたちは見るであろう」(マテオ26・64) 神の力と栄光は人の子の内にあります。私たちは真の人、真の神、唯一の人、神に再び直面します。そして絶えまなく御子の御許に進み出て信じ、祈り、礼拝するので

8 アタナシウスは、パウロの書簡のこの節に触れてこう述べています。「キリストを称揚されたこの表現はみことばの本性が称揚されたことを意味しているのではない。みことばの本性は常に神と等しいのだから。むしろこれは、人性の称揚を意味している。それゆえ、この表現はみことばの託身(受肉)後にのみ語られる。「卑しくされた」のも「称揚された」のも人間の一面においてである。唯一卑しいものだけが称揚される」(Adversus Arianos Oratio I・4) さらに付け加えると、罪によって低められ、苦しみの状態において恥ずかしめを受けた人間性。全人性は、人であるキリストの称揚の内に新たな栄光の源を見出すことができるのです。

最後に、イエズスが御自身をよく「人の子」と呼ばれた事実について述べなければなりません。(例えばマルコ2・10、28、14・62、マテオ8・20、16・27、ルカ9・22、11・30、ヨハネ1・51、8・28、13・31等) 当時の言い方では、この呼び名は全ての人と同じ真の人を意味しました。確かにキリストの真の人性を示しているのです。

謙遜であれば称揚される

「真の人キリストについての連載は今回で終わります。」

不変の教え

福音書に現われる女性

回勅「女性の尊厳」

抄訳

福音書を見ると、異なる年齢と様々な社会条件の女性が登場します。病や身体的苦しみをもった女性にも出会います。「十八年前から病気の霊につかれていて、かかんだままでまっすぐ立つことはできなかった女性」(ルカ13・11) あるいは「熱病で寝ていた」シモンの義理の母(マルコ1・30) さらに、「出血症をわずらっていた」婦人(マルコ5・25〜34参照) 彼女は誰にも触れることができませんでした。触れられた人は「汚れる」とされてきたからです。それぞれが癒されました。最後に述べた出血症をわずらっていた女性は、「人々の群にまじりながら」(マルコ5・27)、イエズスの服に触れました。そして、「あなたの信仰があなたを救った」(マルコ・34)とイエズスからその篤い信仰をほめられたのでした。一人息子を生きかえらせてもらったナインの寡婦もいます。彼女はイエズスの慈しみを経験したのです。「寡婦を見てあわれに思われた主は、(泣くではない)と言われたのです。(ルカ7・13) 最後はカナンの婦人がいます。彼女はその信仰と謙遜、母親特有の広い心ゆえに、イエズスに称賛されました。「ああ、女よ、あなたの信仰は深い。望みどおりになれ」(マテオ15・28)

カナンの婦人は娘の治癒を願っていました。イエズスに出会い、イエズスから多くの恩寵を受けた婦人たちの中には、イエズスが使徒たちと町々や村々を巡って神の国についての良い便りを告げる旅に同行した人もいます。そして彼女たちは、「自分たちの財産で彼らを助けていた」のです。聖書には、ヘロデの家令クザの妻ヨハナの名前を記すと共に、「その他の」婦人と書いてあります。(ルカ8・1〜3参照)

ナザレトのイエズスが神の国についての真理を判り易く示すために使われたたとえ話にも女性が登場します。無くした銀貨(ルカ15・8〜10参照)やパン種(マテオ13・33参照)、賢い乙女と愚かな乙女(マテオ25・1〜13参照)などです。中でも感動的なのはレプタの話です。金持が「献金箱に寄付を入れ、(…)ある貧しい寡婦が二レプタを入れる」のを見ておられたイエズスは仰せになった。「あの貧しい寡婦は誰よりも多くのものを入れた。(…)あの女は乏しい中から、暮しの費用を入れたからである」と。(ルカ21・1〜4) このようにしてイエズスはあの女性を模範として示し、彼女の名誉を守られました。当時の社会や法律組織

では、寡婦は保護されていなかったからです。(ルカ18・1〜7参照) イエズスの教えと振舞いには、当時の社会を支配していた女性差別を見つめることはできません。主の言葉と業のどれを取り上げても、女性が受けるべき尊敬と名誉がはっきり現われています。聖書は「アブラハムの子」という呼び方を男性にしか使わないのに、イエズスは、かかんだままで立つことのできない婦人を「アブラハムの娘」(ルカ13・16)と呼ばれました。ゴルゴタへ向かう苦しみの道で、イエズスは婦人たちに仰せになります。「エルサレムの娘よ、私のために泣くことはない」と。女性に対する、また女性についてのこのような話し方は、当時支配的であった習慣にとって一つの「革新」でした。

この点が一層明らかになるのは、罪人、周知の罪人、姦通女と、人々が軽蔑して呼んでいた女性に対するイエズスの態度です。イエズスが、「あなたには五人の夫がいたが、今のは夫ではない」と、仰せになったサマリヤの婦人がいます。自分の秘密をイエズスが御存じであると知ったその婦人は、イエズスを救い主であると認め、近所の人々のところへ伝えに走って行きます。彼女がこの結論を出すに至るまでの会話は福音書の中でも最も美しい箇所の一つです。(ヨハネ4・7〜27参照)

人々の非難の的となっていたあの周知の罪人は、ファリサイ人の家に入り、イエズスの御足に香油を塗りました。それを見てつまずいた主人に向かって、イエズスは

「この人の罪、その多くの罪は赦された、多く愛したのだから」と仰せになりました。(ルカ7・37〜47参照) 最後に、多分他のすべてにま

して感動的な場面があります。姦通の最中につかまった女性がイエズスのもとに連れてこられます。「モ

ーゼはこういう者を石殺しにせよと律法で命じられています」という問いかけに対して、イエズスは、「あなたち

ちの中で罪のない人がまずこの女に石を投げよ」とお答えになります。この答えに含まれている真理の力に

圧倒された人々は、「老人をはじめ一人一人去って行き」、やがてイエズスと女だけが残ります。「婦人よ、彼

らはどこに行ったのか。あなたを罰した人はいなかったか。女が、「主

よ、一人も」と答えると、主は仰せになりませんでした。「私もあなたを罰

さない。行け、これからはもう罪を犯さぬように」と。(ヨハネ8・3〜11参照)

これらのエピソードを読むと、キリストこそ人間の内にいるもの

もの、男性と女性の内にあるものを(ヨハネ2・25参照)御存じの御方で

あることが真に明らかになります。主は、人間の尊厳、神の御目から見た人間の値打を知っておられます。キリスト御自身がこの値打を決定的に確認しておられます。主が仰せになることとなさることの全ては贖いという超越の秘義において最終的に実現するのです。救い主としての働きの間に会った婦人たちに対するイエズスの態度は、女性一人ひとりを作るにあたり、キリストにおいて女性を選び、そして愛される、神の永遠の計画を反映しています。したがって、女性一人ひとりには、その存在自体を神が望みになった、この地上における唯一の被造物なのです。一人ひとりが「最初から」女性として人間の尊厳を遺産として受けています。ナザレトのイエズスはこの尊厳を確認し、思い出させ、繰り返し、福音と贖いの中に組み入れられました。それ故、女性に関するキリストの行いと言葉の一つひとつを超越の秘義の中で考えなければなりません。このようにして、すべては完全に説明されるのです。(八月十五日)

「この人の罪、その多くの罪は赦された、多く愛したのだから」と仰せ

になりました。(ルカ7・37〜47参照)

最後に、多分他のすべてにま

して感動的な場面があります。姦通の最中につかまった女性がイエ

ズスのもとに連れてこられます。「モ

ーゼはこういう者を石殺しにせよと律法で命じられています」という問い

かけに対して、イエズスは、「あなたち

ちの中で罪のない人がまずこの女に

石を投げよ」とお答えになります。この

答えに含まれている真理の力に

圧倒された人々は、「老人をはじめ一

人一人去って行き」、やがてイエズス

と女だけが残ります。「婦人よ、彼

らはどこに行ったのか。あなたを罰

した人はいなかったか。女が、「主

よ、一人も」と答えると、主は仰せ

になりませんでした。「私もあなたを罰

さない。行け、これからはもう罪を犯

さぬように」と。(ヨハネ8・3〜11参照)

おかげさまで発行100号

教皇様の声

年間購読者募集中

日曜日ごとの「お告げの祈り」の時や水曜日ごとの一般謁見の時を始め教皇さまは、あらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙は、ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのままわかり易い日本語に訳して伝える月刊紙です。

年間購読申込要領

■教会でまとめて、お申込みの場合
教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料になります。年間購読料は600円です。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申込ください。

■個人で直接お申込みの場合
1,300円(年間購読料800円+送料500円)を郵便振替にてお送り下さい。

見本紙は40円切手同封の上、ご請求ください。

財団法人 精道教育促進協会

〒659 兵庫県芦屋市船場町12-6 ☎0797-31-3452

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393